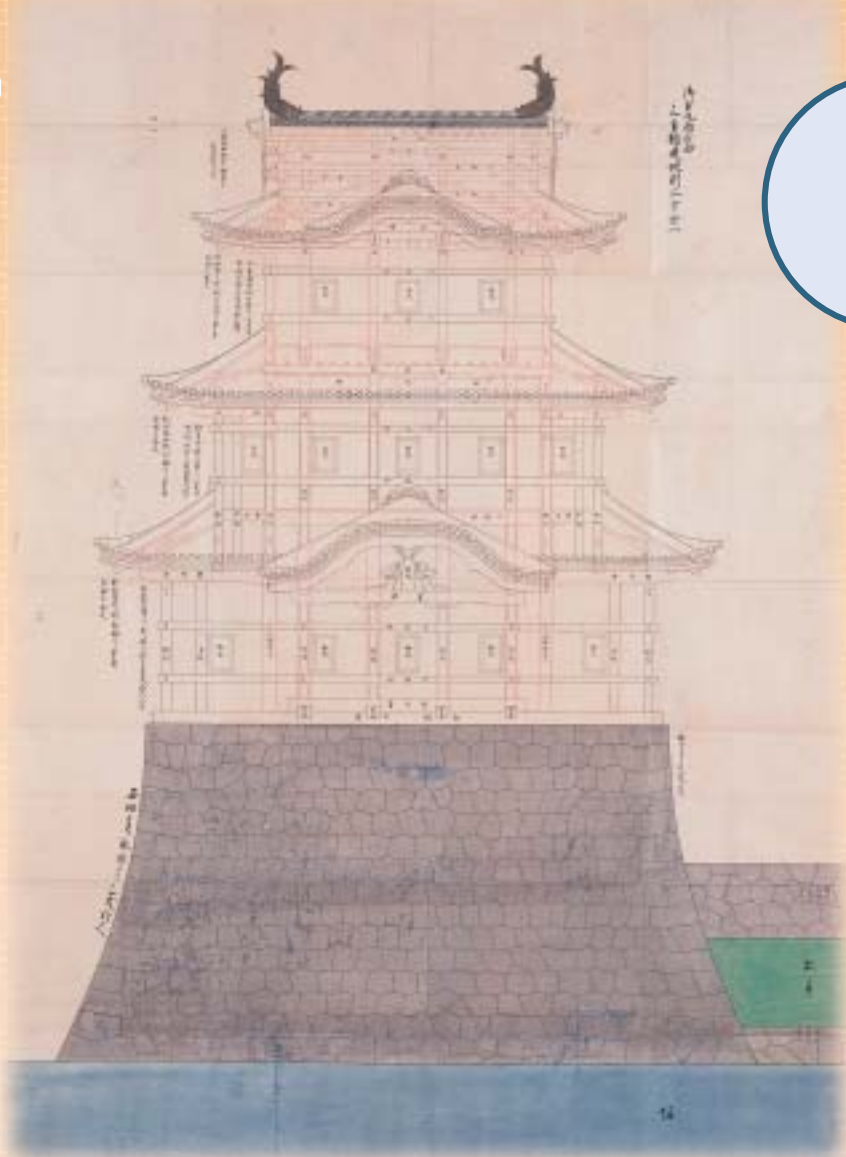


豊田市
郷土資料館
だより
No.66

Toyota City Museum
Of
Local History



目次

- ・企画展「とよたの近世城郭—発掘調査成果を中心に—」… 2
- ・寄贈資料紹介「雲仙の放牧」「炉辺」…………… 3
- ・所蔵資料紹介「資料にみる挙母藩の国替」…………… 4
- ・「博学連携ノススメ」vol.3 …………… 5
- ・特別展報告「茶と器—味・技・心の先駆者—」を終えて …… 6
- ・埋蔵文化財調査速報 …………… 7
- ・文化財シリーズ66・資料館 NEWS …………… 8

とよたの近世城郭 – 発掘調査成果を中心に –

1月31日(土)～3月15日(日)

江戸時代の豊田市域は大きな藩に支配されていたのではなく、主に挙母藩・伊保藩・岡崎藩・刈谷藩の領地、寺部渡辺家領・旗本領・天領(江戸幕府の直轄地)・寺社領となっていました。挙母藩には城が築かれ、伊保(保見町)や寺部(寺部町)などには陣屋が置かれました。また、主に旗本領であった滝脇(滝脇町)・酒呑(幸海町)・足助(足助町)・大島(東大島町)・則定(則定町)などにも陣屋が置かれていました。

近年、様々な開発に伴って市内各地で発掘調査が増加しています。城郭に関連したものでは、挙母城(桜城・七州城)で調査が実施されたのをはじめ、寺部城下の武家屋敷にあたる区画で調査がされるなど、この数年間に10数回に及ぶ発掘調査が実施されました。これらの調査により、それまで古文書や絵図などから推測するしかなかった城の具体像が明らかになってきました。

今回の企画展では、これらの城郭のうち、近年発掘調査が行われた挙母城(桜城・七州城)と寺部城下の出土資料を中心に、調査であらたに出土した資料を展示し、あわせて絵図などの資料と対比させて紹介します。特に、桜城跡の展示資料は瓦や陶磁器などの遺物だけでなく、石垣の下に敷かれた胴木、堀に堆積した土の断面パネルや土塀の一部など保存処理された資料も展示しています。また、「挙母御城地并惣絵図」は展示ケースには展示できない大型の絵図で、普段なかなか見ることのできない資料ですので、ぜひこの機会



桜城跡二の丸北西部石垣

にご覧ください。

主な展示資料

桜城跡二の丸出土石垣の石・胴木・土塀の一部
 桜城跡二の丸堀土層断面剥ぎ取りパネル
 桜城跡二の丸堀出土陶磁器・瓦・木製品
 「挙母御城地并惣絵図」
 七州城跡出土陶磁器・瓦
 寺部城下出土の各種陶磁器・瓦



寺部城下の武家屋敷地の溝と建物跡



展示室の様子(桜城の石垣と胴木)

(杉浦 裕幸)

「雲仙の放牧」「炉辺」

平成20年11月に市内本新町在住の杉本誠氏（前豊田市文化財保護審議会委員）より表題の牧野敏太郎の作品2点が市へ寄贈されました。ご厚意に感謝し、以下に紹介するしだいです。

牧野敏太郎は文久元年(1861) 挙母藩士牧野利幹の子息として樹木広小路の藩邸で生まれました。牧野家のもと藩医でしたが祖父の代から150石の士分として仕えた家でした。霧のロンドンを描いて著名になった牧野義雄とは兄弟で敏太郎の弟にあたります。敏太郎は幕末から明治の激動期のなかで新設間もない挙母郷学校を卒業し、訓導となり教職に就きました。

教鞭の傍ら、神谷紫水、田部井竹香に南画を習い、植物、挙母(七州)城、馬の図を得意とし、竹亭と号しました。七州城の鳥瞰図は幼少期に実見した記憶により描かれているので歴史的資料としても高く評価され、挙母を代表する画家のひとりです。明治20年代には名古屋洋画研究会で野崎兼清から洋式鉛筆画を習得しています。大正13年(1924) 63歳で家督を譲り、子息の暮す長崎市に転居しました。長崎では九州一円を周遊し、南画と漢詩に没頭し多くの優れた作品を残しました。市域に伝えられる作品の多くが長崎時代といわれています。昭和12年(1937)10月、75歳でなくなりました。

「雲仙の放牧」は縦128.8cm、横286.1cmの紙本淡彩六曲半双の屏風で、雄大かつ峻険な雲のかかる雲仙岳を背に、山麓の丘陵で白、茶、栗毛の馬6頭が遊ぶ壮大な構図です。

遠くの雲仙岳は比較的細い線で谷間に陰影をつけて遠近を表しています。近景は南画風に尾根状の地形と緑の草を鮮やかに描きだしています。洋画と南画の技



法がそれぞれ生かされていて、時代と独特な趣が興味をひきます。右から一扇目の下端に竹亭と墨書され、竹と亭を一字2個で表した落款がおされています。

「炉辺」は縦113.5cm、横26.5cm、紙本淡彩軸装。囲炉裏にかけられた自在鉤を太い筆致で描かれ、その下に一句添えられた俳画とよばれる作品です。長崎時代の画で、敏太郎の作品としては晩期に属すると思われます。俳句は「それぞれの本 読みふける 囲炉裏かな 青波」とよまれています。青波は句をよんだ人の雅号で杉本誠氏の尊父、^{しずか}坦氏です。つまり敏太郎の画に坦氏が讃を加えられたもので両者の親交の深さ

がうかがわれます。坦氏は明治22年(1889)生まれで、長年挙母町助役、豊田市農業協同組合組合長等要職を歴任された人で俳句のほか和歌、随筆、茶道に造詣が深く、昭和52年になくなられています。親交のあった期間は敏太郎が長崎に赴いた大正14年から晩年の昭和12年の間、坦氏36歳から47歳頃と推測されます。敏太郎と挙母の人々との交流の一端をうかがうことができました。

紹介しました2点は昭和59年開催の本館特別展「牧野義雄・敏太郎展」に出品いただきました。

(松井 孝宗)

資料にみる挙母藩の国替

～内藤家文書から～

江戸時代の大名は、幕府の統制力強化のため国替(転封)という制度によって支配地を変えられる事がありました。現在の中心市街地を領地としていた挙母藩は江戸時代を通して4回領主が変わっています。1604年～1664年三宅家、1664年～1681年幕府領(挙母藩ではない)、1681年～1749年本多家、1749年～明治まで内藤家です。このうち明治期まで領主であった内藤家の資料「挙母藩内藤家文書」が豊田市郷土資料館に保管されています。今回はこの中から、内藤家が国替で挙母に来た時の役人が書き記した記録からどのように国替が進められたのかを紹介します。



資料は「三州挙母御請取控帳面」で2冊にわかれています。上野国安中(群馬県)に城を構えていた内藤家が国替を言い渡されたのが、寛延2年(1749)2月6日、藩内では挙母の様子を調査するために選ばれた役人が2月24日に安中を出発して挙母での仕事を終えて木曽路を通過して3月10日に帰ったという記事にはじまり、領地を変えるにあたっての一連の出来事が箇条書きに記録されています。最初の報告では「米両に九斗五升程」といった米の相場に始まり小豆、酒、味噌、木綿、瀬戸物など生活必需品の値段の調査がされこれから支配地となる挙母の状況を把握している様子がわかります。この後、国替・引越しのための準備が整えられていく事になります。実際の引渡しは5月22日23日、この日にむけてまず先発役人鈴木与七郎が5月9日に安中を出発した後、次々と重役たちが安中を出発し、挙母にて本多家の役人、幕府の代官所役人と打ち合わせを行います。そして町の有力者・永田六兵衛とも会っています。六兵衛は町方の準備や村役人の取り次ぎを任されたのでしょう、金二百疋が渡されています。

さて幕府の赤坂代官天野助次郎は、5月21日に本多家から書類を受け取り、翌22日には内藤家へ郷村帳、鉄砲証文が渡されました。それから永田六兵衛の座敷の庭に村々の名主が呼び出され、領主が変わった申し渡しがあり村へ鉄砲証文が渡されました。その後侍屋敷、長屋の引渡し郷帳、林帳、鉄砲帳、五人組帳などの書類が引き渡されました。さていよいよ23日に殿様の「居所引渡し」です。陣屋門の内側に本多家の武器と人を立て、外側に内藤家の武器と人を立て朝8時に双方が揃った後、案内に従ってまず内藤金一郎と家老(殿様が幼少のため家老付き添い)が陣屋に入り、本多兵庫頭と内藤金一郎が入れ替えの儀を行い受け取り渡しが済むと、双方の家老が出て陣屋の門に並んでいた武器と人が入れ替わります。その後中町口から本町口まで総勢125人ほどの行列が組まれました。続いて、ご馳走が振舞われ挨拶や代官へのお礼や手代へのご祝儀が配られます。広間には具足が飾られ、玄関前や御堀際、町中にも飾手桶が置かれるなど祝いムードとなります。

さて一通りの行事が無事済むと江戸表へ飛脚を出し報告をしますが、面白い事に内藤家の飛脚と本多家の飛脚が同時に江戸に着くように相談して一緒に出かける手配をしています。報告する内容も相談し受取り(受渡し)の時刻も双方の食い違いがないように確認されています。続いて、挨拶として5月24日には近隣の領主である渡邊半蔵家、岡崎藩、西尾藩、刈谷藩へ挨拶状を出しています。

資料の後半では、殿様の視察の様子、お触書の掲示など領内の支配体制が次第に整えられていく様子がわかります。(伊藤 智子)





茶臼体験をする児童

1. 体験から学びとる学習への挑戦

4年生の「古い道具と昔の暮らし」の学習は、「古くから残る暮らしにかかわる道具や、それらを使っていたころの暮らしの様子を調べ、人々の生活の変化や人々の願い、苦心を考えるようにする」ことを目標としています。

これまでの学習では、暮らしにかかわる道具や暮らしの様子を調べるために、教科書や副読本「豊田」を通して知識を習得していました。さらには各家庭や近隣の旧家から道具を借用したり、使い方を取材したりして理解を深めてきました。しかし、暮らしにかかわる道具に実際に触れてみて現在の道具と比較してみないことには、その暮らしの様子は見えてこないし、生活の変化や人々の願いに気づくことはできません。

そこで、郷土資料館のスクールサポート事業では、できるだけ昔の暮らしにかかわる古い道具を児童に体験させ、現在の道具と比較できるような準備をはじめました。

2. 触れることのできる道具の準備

豊田市郷土資料館では、以前より「民俗資料館」と館内の道具の利用を体験用として推奨してきました。今年度は、さらに多くの道具を体験用として準備しました。

体験用に準備した古い道具

〈民俗資料館〉

江戸時代後期の庄屋の家屋内常設展示物

〈生活〉

炭火アイロン・薬研・ます・石臼（茶臼）

さおばかり・箱枕・箱膳・洗濯板・着物

〈農具〉

千歯こき・足踏み脱穀機・唐箕・きづるうす

台唐・千石通し・万石通し・背負い籠

〈乗り物〉

やまかご

3. 二つのサポート形式

①資料館見学サポート

資料館へ見学にきた児童への道具の準備と体験時の解説。

②出前授業サポート

体験に必要な道具を教室に持ち込んで、児童が体験できるようにする。

今年度11月現在の各サポートへの利用状況は、

①15クラス(472名) ②4クラス(160名)でした。

来館できる学校については、民俗資料館での学習が実施できるため大変有効ですが、諸事情で来館できない場合でも、出前授業サポートを行うことによって効果的な学習を行うことができました。

たくさんの昔のものを体験でき、子供たちはとても喜んでいました。薬研や茶臼、炭火アイロンなど、目にするだけでも勉強になる物を手に取り、実際の使用方法で試すことができました。「まずに実際にお米を入れてみせる」「粘土や消しゴムを竿はかりでつり合わせてみる」など体験のさせ方に工夫があり、感心しました。それを使っている昔の人の気持ちまでが伝わってくるようでした。

〈N小学校 4年生担任〉

(伊藤 俊満)

特別展「パイオニア茶と器—味・技・心の先駆者—」を終えて



豊田市郷土資料館では、毎年、3～4回の「企画展」と、1回の「特別展」を行っています。特に特別展は企画展と比べ、準備期間・予算規模ともに大きく、郷土資料館による近年の調査・資料収集の成果を集結させた、ホットな郷土史の話題を取り上げることにしています。この秋は特別展として「茶と器—味・技・心の先駆者—」を開催し、11月1日～12月14日までに2000人近い方に観覧して頂くことができました。

「茶」に関する展示は毎年多くの博物館・美術館で行われます。この秋、豊田市近隣の博物館・美術館でも茶道具の名品を取り上げた特別展がいくつか開催されました。喫茶の文化は、食文化のみならず礼法、陶芸、建築、絵画、書など様々な分野に大きな影響を与えており、宗教（仏教・神道）と匹敵する、日本文化の大きな軸となっています。それゆえ、「茶」の展示は、集客力のある展覧会の「定番」となっているのです。

「豊田市」の「郷土資料館」らしい茶の展示とは何か、また、館だより65号で記したような、豊田市ゆかりの茶人や茶の生産といったローカルで専門的な話題を広く知ってもらうためにはどうすればよいか、と随分悩みました。そのため、集客性のある名品をそろえつつ、一方で実際に茶をいれて味わう喫茶コーナーや、バスツアー・体験講座など、楽しさ・面白さを実感できる参加型のイベントを会期前から数多く実施しました。喫茶コーナーには「煎茶」「抹茶」、足助で古くから飲まれてきた「寒茶」を用意しました。自分でいれるスタイルが大変好評であったようで、ブログで紹介して下さった方もおり、大変嬉しい反響でした。イベント

の多様さ（講演会2種、バスツアー2種、体験講座3種）は、これまでの当館特別展で例のないものとなり、展示開始前から会期終了まで息つく間もない忙しさでした。その甲斐もあり、複数のイベントに参加するため何度も来館して下さった方もいました。感銘を受けたのは、「お茶農家をめぐるツアー」に際し、イベントを受け入れて下さった茶業組合清水組合長はじめ製茶農家の方々が、今回の企画について深いご理解を示して下さい、生産の場を案内して下さいとのことでした。今後、地域で育まれた地場産業と資料館との連携が深まり、新たな展開が生まれるきっかけになればと思います。

反省点は数多くありますが、特に大きなものを一つ。それは展示情報の「広報」です。現在、当館では、市内・市外各種施設、公共交通機関におけるポスター掲示・チラシ配布、刊行物やHPへの掲載により広報を行っています。今回、試みとして茶道教室や陶芸サークルなど、展示に関連する市内（約500件）・市外（約200件）の個人・団体へ案内を送付しました。その結果、送付前の11月期に比べ、送付後の12月期は約30%の入館者増となりました。対象を絞った広報の大切さを痛感しつつ、会期前の送付ができなかった点、新たな広報の場について検討の余地があった点が反省されます。

準備を始めた昨春5月から、会期終了の12月まであったという間でしたが、博物館（郷土資料館）や文化財の持っている可能性について発見するところの多い日々でした。展示にあたり、ご協力頂いた皆様、来館者の方々に深く感謝いたします。（高橋 健太郎）



展示室の様子（10月31日内覧会）



お茶農家をめぐるツアー



どうたくん

埋蔵文化財調査速報



すえちゃん

○千石遺跡〔上野町・千石町〕

千石遺跡は矢作川の左岸に形成された沖積平野から埋没段丘にかけて立地しています。遺跡の北側（寺部地区）には、矢作川によって形成された河岸段丘のうち、簗川面と呼ばれる低位段丘があり、その段丘裾から下方の沖積地へと、まさに地形が移行する地点が今回の調査区となっています。遺跡の標高は約35mで、周囲を見回すと北から南、東から西へと地形が緩やかに下っていく様子がわかります。本地点よりも南側に下っていった先には、矢作川の氾濫によって形成された自然堤防があり、その上に立地した平成9年の調査区では、縄文時代から江戸時代までの人々の生活の痕跡が見つかっています。その中でも特に、8世紀後半～9世紀後半の竪穴住居9軒、掘立柱建物1棟が土器など多くの遺物を伴ってみつき、古代の集落跡として知られています。また縄文時代の遺構も発見されており、中期から後期、晩期までの土器が出土しています。

今回の調査では、古代の堤とそれに伴う木樋が発見されました。

堤 北西から南東の方向で長さ約30m、幅約6m、高さは現況で約30～40cmを残すのみです。上部は後世の削平を受け、当時の高さは不明です。緩やかな斜面が平坦または高まりになっている場所を選んで、かまぼこ状に盛土をして築いているようです。



堤（基部のみ残存）全景（西から）



木樋出土状況

木樋 残存する長さは約4.4m、径約25cmです。材はヒノキ属のものを用いています。放射性炭素年代測定の結果、材となった木の年代が9世紀代（平安時代前期）というデータが得られています。構造としては一木を縦に割って内部をくり抜き、割った材で蓋をして管としています。管部と排水口部で部材が分かれており、接合部にホゾ加工を施し、そこで木樋の角度が変わっているのがわかります。また排水口部は両側を杭で固定されていることから、木樋は元の位置を保っている可能性があります。また蓋がある管部のみ、設置後に埋められて暗渠として利用されていたと思われます。残存部分で蓋部分に孔があけられていますが、おそらくこの孔に栓をするなどして取水量を調整していたと推定されます。なお取水口よりも上部に関しては、堤と同様、後世の削平を受けて壊されているため、残念ながら構造がわかりません。

排水口のすぐ前には角杭が十数本打たれています。木樋を通して流れてきた水の流れを調整するものと思われます。

溝遺構

堤の基部上に、直交する溝が2条見つかっています。溝を埋めている土は明らかに人為的に入れられた土と思われますが、これがどういう性格のものなのか、今後の調査の進展によります。

堤と木樋の設置は、当時の最新灌漑技術の結晶であると思われます。今回の木樋の発見は西尾市室遺跡に続いて愛知県内では2例目となります。堤と木樋がセットで発見されることは全国的にも調査例が少なく、当時の灌漑技術を知る上で今後大変貴重な資料になるでしょう。

文化財シリーズ



まがいぶつ
押井の磨崖仏

豊田市指定有形文化財・彫刻

磨崖仏は自然の岩壁に
仏像を彫刻したもので、
愛知県下では押井町（旭
地区）のものと新盛町
（足助地区）の大鷲院に認
められるだけで他に例が

ありません。

押井の磨崖仏は、地上部分の高さ2.5メートル、幅
2.4メートルの岩に、高さ90センチ、幅40センチの2
体の仏像が彫刻されている石仏です。この石仏は地
蔵菩薩と俱利伽羅明王で「願主 後藤藤九郎・松井
平左衛門・鈴木善吉 文久三癸亥三月七日 願主松
井辰治・松井藤左衛門」の銘文が刻まれています。

俱利伽羅明王は俱利伽羅竜が剣に四足をからめて
巻きつき、横を向いて剣先を呑もうとしており、背
後には火焰が燃え上がった姿です。これは不動明王

の象徴であることから俱利伽羅不動とも呼ばれてい
ます。俱利伽羅不動は、水神の意味で造られたり、
修験道の不動信仰にもとづいたもので類例が少ない
ものです。地蔵菩薩は蓮華座に乗り、右手に錫杖、
左手に宝珠を持つ形式です。旧旭町で文化財として
昭和50年1月10日に指定し、現在でも大切に保存さ
れています。



資料館NEWS

冬休み子ども週間を開催しました。

12月20日から1月12日まで「冬休み子ども週間」を開
催し801人の来館者がありました。



花もちづくり餅つき体験

子どもたちは、すごろく・ふ
くわらい・羽根つき・コマ
まわしなどお正月の遊びに
夢中でした。また講座では
花もちづくりを行い子ども
から大人まで多くの市民の
方に参加して歴史にふれて
いただきました。

「郷土資料館のひなまつり」

2月7日から3月8日まで「郷土資料館のひなまつ
り」を開催しています。市内から寄贈された御殿飾り、
内裏びな、土人形、抱き人形を展示しています。現在

開催中の企画展「と
よたの近世城郭」
とあわせてぜひ資
料館へおでかけく
ださい。



内裏びな

近代の産業とくらし発見館 企画展

「尾三バス、走る！」

3月22日(日)まで開催中！

愛知県下初の本格的なバス会社
「尾三自動車株式会社」ゆかりの人
物・浦野謙朗、本多松三郎の業績
とともに資料、車掌・運転手・車
両などの写真を紹介します。



車掌さんのカバン

利用案内

開館時間 9:00～17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館) 年末年始

入場料 無料(特別展開催中は有料)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩15分

駐車場 約20台

■豊田市郷土資料館だより No.66■

平成21年2月26日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎ (0565) 32-6561 FAX (0565) 34-0095

E-mail : rekihaku@city.toyota.aichi.jp

URL : <http://www.toyota-rekihaku.com>

※豊田市郷土資料館だよりはHPでもご覧になれます。